隨筆松花堂

井川定慶著

井川定慶著

隨筆松花堂

謹呈

立命館出版部

昭和十四年六月一日印刷
昭和十四年六月十日發行

【定價金壹圓五拾錢】

著者　井川定慶

發行者　京都市上京區廣小路寺町東入
立命館出版部
代表者　竹上孝太郎

印刷者　京都市下京區坊城通五條下ル
西川太良吉

發行所　京都市上京區廣小路寺町東入
立命館出版部
振替口座六阪二六九四四番

發賣所　東京市京橋區銀座西二丁目一番地
立命館出版部
振替口座東京七五三六二番

京都・大内印刷所・印刷

序文

井川定慶師の松花堂に關する隨筆集が刊行されることになつて、拙序一篇を求められた。然るに、私は松花堂に關して知る所が極めて少く、又進んで自ら研究したこともない。光悅のことは、その版本を中心として多少の調査を試みたこともあり、又私の住居が鷹ケ峰に遠くもないため、時々そこに探勝したこともあつた。男山の方になると、京住ひ三十年間、未だ一度も參拜いたさず、甚だ申譯なく存じてゐる樣なわけで、今この松花堂隨筆の序文を草するに方つても、何となく神慮かしこく筆の進みがたどたどしく感じられる。

井川師の「隨筆松花堂」の目次を見ると、著者が多年京都帝國大學圖書館に奉職して、專ら近衞公爵家寄托の文獻の整理に任じ、公暇の折々、松花堂が近衞應山公およびその父君三藐院の方たちの知遇を受けたことを始め、慶長寛永間に於ける幾多著名の博雅人との親交を敍述し、近世初期の文化史學術史の一面を描寫した所の十數篇を以て本書を成したことが知られる。それらの中には、すでに私の讀んで裨益を請け興味を感じた諸篇も交つてゐる。典據の正確さはさておき、文章の平明と記述の簡潔とを以て讀者を直に趣味環境に導き、親しく松花堂其人に對せしめる樣な趣があつたことは、今尙私の印象に新たなる所である。曾て一讀の際にも、いづれは纒めて一冊に編まれ、通讀者に一貫した感興を與へられる機會もあらうかと期待したのであつたが松花堂の三百年記念を迎ふるに至つた今年、私たちが翹望した其の一冊が世

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

に現はれるやうになつたのは、私にとつても何たる欣幸であらう。

今や書道は茶道と共に益〻復興の機運に向ひつゝあることは、周知の事實である。惟ふにこれらの道は、單なる技藝、一片の風流韻事として、之を排斥すべきものでなく、典雅沈靜なる教養の具と見做して差支へないものである。戰時中と雖も、之を全く等閑に附すべきではあるまいと思ふ。

殊に茶道の如きは古武士の嗜好として戰國時代に於て大いなる發達を見た跡があつたではないか、若し夫れ書道に至つては、以て姓名を記るせば足るといふ、實用の具とのみ考へてはならない以上、松花堂のごとき書道界の偉人は、その點よりも益〻之を顯彰すべきであらうと考へる。

いづれにもせよ、井川師が松花堂の面目を躍如たらしめた著書の世に出でんとするは、斯道のためにも頗る慶ぶべきことであり、人はさておき私自身の

最も歡迎する所であるので、いさゝか取りとめもなき所懷を陳べて序文とする次第である。

昭和十四年四月二十四日

京都帝國大學名譽教授
帝國學士院會員文學博士

きのふ拙序を著者の手に委ねた後、けふ水無瀬神宮に詣でたかへるさ、水無瀬川の右岸づたひに、桂川の淀川にそゝぐ川下に出で、橋本の渡しを彼岸に越して、男山八幡宮に初の參拜を遂げたのは、松花堂の手引きで誠に難有かつたお社から南向して御文庫の少し先きあたりから右か左かへ下山したらば、松花堂の遺蹟に達しもするかと、聊か考へ迷つたが、それには著者の東道を得るなり、本書の一覽を經るなり、ともかく之を後日に期する方が安全だと思つて元の道へと引きかへした。即ちこの由を序文の末に書きそへて、松花堂および著者に感謝の意を表はしておくわけである。（四月二十五日追記）

空海と昭乘

大江素天

菓子屋の老爺が左り黨の名を呼ぶ、それが風流逸脫かと聞き直したほどの野人に、寛永三筆の一に列せられた松花堂昭乘の一生を手のうちに丸めて縱横に書きまくつた畏友井川君の隨筆を賞めちぎる資格があるとは思はぬが昭乘は猩々に通じ、猩々は惺々に似た字である。昭乘は晩年、一の號を惺々といつたのだから、全く緣のない奇問を發した譯でもなかつたと、あとでひとり

笑つた私であつた。

昭乘が一生を通じてなした仕事の中で、私が何よりも嬉しく思ふのは、日本へ唐朝文教の粹を命がけで齎らした平安朝の傑僧空海の筆意を渴仰し、四天王寺に据りこみ、龜井水を硯にうけ臨模これを久うしたといふ逸話である。文鏡秘府論や遍照發揮性靈集に無限の興味を持ち、古代文化の興隆にひそかに思ひを馳する時、いつも野山の方に向つて感謝の鐘を投げぬことはないといふほど空海を敬慕する私にとつて、この傑僧に親しみをもつ人を、古人であると今人であるとを問はず、一人でも見出せば私の心は忽ち歡びに慄えるのである。

昭乘が不思議な一老僧に會つて六書八體六十餘條の筆法を口授され、阿字觀明かなれば筆端自ら神あり、つとめて自然を師とたのめとさとされたとい

ふやうな話も、矢張り空海私淑から生れた神祕的な佳話だと思ふ。

それからの昭乘は翰墨のこと自在三昧を得、繪も華麗を去つて閑淡に入りすばらしい一家をなした。

井川定慶君が近衞家の文書山積の間に短軀を埋めて、心なき禽獸と語り合ふほど慈忍に富んだこの綺人の遺した金玉を丹念に拾ひあつてゐることを知つたのはもう三四年も前のことである。その後あちらの新聞、こちらの雜誌に、繞まず倦まず昭乘の遺事逸話を書いてゐるのを見て、最初に奇問を投げた野人自らの心の罰としても、これが纏められて世に出る時を祈つてゐなければならなかつた。

今その時が來たのである。番茶の味より知らぬ私は、茶人としての松花堂や、喧騷を厭ひ吉野に深く蟄伏して神詠に感じたといふ昭乘の氣持など、味つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

て見ても分らぬが、癈を發して知死期の時にも高祖弘法大師の「生はこれ樂にあらず衆苦の聚まるところ、死もまた喜ばず、憂ひたちまち逼る」の語を評しながら藥餌を斷つて地に眠つた眞劍な人間らしい昭乘の姿を、ほんとうの昭乘として、井川君の隨筆からみつける人が多くの讀者の中には必ずあると信じてゐる。

目次

題字

官休庵　千宗守宗匠

今日庵　千宗室宗匠

不審庵　千宗佐宗匠

序文

文學博士　新村出先生

大江素天先生

一殊遇……一

1　宮本武藏（一）　2　近衞關白（三）

二　澤庵和尚との交友……七
1　松花堂筆の畫面（七）　2　澤庵の生立（八）
3　近衞公の訪れ（九）　4　八幡の風流人（一一）
5　澤庵の流罪（一三）　6　配所の便り（一六）
7　古き唐墨（一八）　8　松花堂好み（一九）
三　江月和尚の心づくし……二一
1　松花堂の臨終（二一）　2　江月の書狀（二三）
3　江月和尚の生立（二七）　4　武家の歸仰（三一）
5　皇室の恩寵（三四）　6　近衞家への出入（三六）

7 松花堂の覺悟（三九）

四 金森宗和や小堀遠州……四四

1 金森宗和（四四）　2 小堀遠州（四九）

3 近衛公と小堀遠州（五三）

五 伏見の茶會……五六

1 臺子の傳授（五六）　2 近衛家養子說（六〇）

3 關白の心遣り（六六）

六 筍進上……七〇

1 中和門院の御病氣（七〇）　2 昭乘の癌病（七三）

3 八幡の筍（七五）

七 尾張中納言……七七

1 數寄屋披き（七七）　2 あひ客（八二）

3 聖人のふく（八六）

八 職人つくし繪……八九

1 職人盡繪のこと（八九）　2 近衛家文書（九二）

3 烏丸光廣卿（九六）　4 職人三十六人歌合（九八）

5 歌仙繪（一〇〇）

九 書の御用……一〇三

1 通鑑の外題（一〇三）　2 眞行草に繪を添ふ（一〇六）

一〇 文藻と風懷……一〇九

1 和歌の連句（一〇九）　2 松花堂といふこと（一一三）

3 南都の御宿（一一五）

一一 落語の始祖のこと……一一三

1 醒睡笑の事（一一一）　2 紫衣の勅許（一一三）

3 安樂庵（一一七）　4 昭乘と往返（一一九）

5 交友の人々（一一一）

一二 奈良の茶道……一二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo